

エヴゲエニイ・イワノヴィチ・アレクセエフ提督 — 海軍司令官にして政治家 —

セルゲイ・チエルニャフスキー

二〇一五年初め、サンクト・ペテルブルグ出版社「ギペリオン」

【Гиперионはギリシア神話中の神の名、日本語では木製の衛星の名としてヒュペリオン、イギリス駆逐艦の場合はハイペリオンと表記】で、『ロシア国立海軍文書館史料にみられる日本・朝鮮史』【История Японии и Кореи в документах Российского государственного архива Военно-Морского Флота】と題された目録、定例文書館案内書が出版された。目録作成作業において基礎におかれたのは、大規模なフォンド文書「アレクセエフ、エヴゲエニイ・イワノヴィチ、提督（号33）」であり、これらの文書は、一九世紀後半から二〇世紀初めの時期の日露相互関係に関する客観的で、極めて興味深い情報を含んでいる。

それ以外に、目録にはさらに三つのフォンドの文書がある。「極東総督海軍暫定軍令部《Временный морской штаб наместника на Дальнем Востоке》」（Ф. 467）、「極東総督海軍陸戦隊参謀本部《Морской походный штаб наместника на Дальнем Востоке》」（Ф. 469）、そして「太平洋艦隊《Эскадра Тихого океана》」（Ф. 650）で、同様に、上記のテーマに付き関連文書を見出すことができる。

新しい目録は既に、日露関係の研究者たち、および、ロシアの学術機関の研究者たちに好評を得ている。エヴゲエニイ・イワノヴィチ・アレクセエフ提督の生涯と業績に直接関係のある文書が基本文献になっている以上、歴史家や同時代に生きた人々のアレクセエフに関する情報や分析が極めて多様で、必ずしも偏頗がないとは言いきれないことを考ええ

ば、この卓越した非凡な人物に関してここで述べることは適切であろう。

エヴゲエニイ・イワノヴィチ・アレクセエフ提督は、おそらく、一九世紀末から二〇世紀初めのロシアの歴史において、もっとも毀誉褒貶のある人物の一人である。アレクセエフの個人的長所や専門的業績の評価に関する反応は様々である中で、この人物は世紀を跨ぎ、海軍庁【Морский ведомств】の軍人、そして、ロシアの外交官として非常に顕著な役割を果たしてきた。

提督の活動の一般的評価は芳しくない。

それは、歴史家の著作におけるよりはむしろ、提督の同時代に生きた人々何人かの回想録の中に反映されている。

E・I・アレクセエフについて最も激しくかつ一貫して悪意に満ちた態度をとったのは、大蔵大臣で伯爵セルゲイ・ユーリエヴィチ・ウイッテである。ウイッテは自己の回想録の中で、提督の外交舞台における活動を評しながら、次のように記す。

「アメリカもイギリスも日本も、それらのすべての同盟国も、公然とであれ、秘密裏にであれ、かつて一度も満州を我々に渡すことに同意しなかったわけで、そして中国もまた同様で、一方、それだからこそ、いずれにしても、満州全土を占領することは必要であり、そうすれば戦争はとうてい避けられなくなったとの確信を持ち続けていた。このことをローゼン男爵「駐日公使、チエルニャフスキー注」は理解していなかった。従って、ローゼンはそのような緊迫した時期に日本と交渉を行うに

は不適切な外交官であった。ましてや彼は実質的には、アレクセエフのような狡猾いアルメニア人「提督は母方がアルメニア人。チェルニャフスキー注」の主導の下にあったのであるから尚更である。もちろん、私は、アレクセエフをこのように性格付けたからといって、このことにより、アルメニア人たちを侮辱するつもりはない。というのは、実際、全アルメニア人の民族性をアレクセエフの下劣な本質と同一視することは、アルメニア人にとって屈辱的なことであろうからである。私が言いたいのは、アレクセエフはその本性においてちつぽけで不誠実な商売人であり、国家を担う外交官ではないということだ⁽¹⁾。

さらに続く。

「陸海」統合軍総司令官【Главныйкомандующий армией】に任命されたのはアレクセエフである。極東総督である。彼は、ただの一度も戦士であったことはなく、陸軍を指揮したこともただの一度もなく、自己の海軍内の出世ですら、海軍勤務のものではなく、むしろ、その外交手腕により獲得している。従って、私のような程度の者が統合軍司令官になったのとまったく同じ程度の司令官でしかなかった⁽²⁾。

ここでウイッテは、穏やかな言い方をしても、真実に叛き、感情に流されているといえる。ウイッテ外相とエヴゲエニイ・イワノヴィチ・アレクセエフの個人的な敵対関係が原因である。

それにもかかわらず、当時の何人かの著名な人物たちもまた、提督のことをあまり高く評価しているわけではない。「アレクセエフ、これはロシアの狡猾な悪魔だ。にもかかわらず、皇帝はアレクセエフを頼っており、自己の信頼感を失いたくないのである。ロシアがどうなるかと、どうでもいいのだろう」と有名なロシアの啓蒙家A・S・スヴォリンは一九〇四年夏、日記に書いている⁽³⁾。

皇帝ニコライ二世は、アレクセエフに対する社会活動家や政治家の否

定的な見方を熟知していたが、実際、提督に対し大きな好感と信頼のこもった態度で接し、それに対する目撃談も少なくない。そのひとつが、一九一一年に示されたもので、国会と海軍省との間に起こった政治的軋轢から海軍大臣の更迭問題が起こった時である。当時のロシア帝国閣僚会議議長【Председатель Совета министров Российской империи】P・A・ストルイピンとの会話の中で、ニコライ二世は次のように言っている。

「国会と共通の言葉で話せるであろう提督はただ一人しか知らない。アレクセエフだ。だが、残念ながら、一般的意見は提督に対しあまりにも否定的だ。提督になんら罪はないにもかかわらずだ⁽⁴⁾」

A・A・イグナチエフは自己の回想録の中で、一九〇四年満州行き列車の中でアレクセエフに会った時の印象を次のように書いている。

「汽車の豪華な客室サロンの中で待つことしばし、我々のところに、総督本人、年のころ五十歳ほど、顎と頬に、黒い、いくらか、白いものの混じった髭を生やし、黒い抜け目のない目をした、ずんぐりとした人物が現れた。この男は、金色の肩章の付いた黒い海軍のフロックコートを着用していたが、その上には三羽の黒い鷲とニコライ二世の組み合わせ頭文字が刺繍されている。それらは、完璧に、提督、同様に、侍従武官長の地位に相当することを示す。総督の断固とした口ぶりは我々の気に入った。個人的には、ペテルブルグからの各種指令に対する彼の鋭い批評にさえも驚きはしなかった。諸省庁の種々の馬鹿さ加減については、幼少時から、父から非常に聞きなれているからだ。おそらく、このアレクセエフの独立独行ぶりはやはり彼の出自から来ているのだろう。彼は【皇帝】アレンサンドル二世の庶子である、つまり、【皇帝】アレクサンドル三世の兄であると根強く言われている⁽⁵⁾」

個人的な資質ではなく、最後の情況がアレクセエフの生涯と業績に否定的印象を与えているということはありうることだ。同様な噂、まして

や公式には確証がない噂は、しばしば、司令官や下僚たちを含め、他の人々と普通の関係を築く上で助けにならないどころか、反対に邪魔になる。提督の出自を皇室と繋げる確たる証拠はどこにも見つけ出すことはできない。これはおそらく、アレクセエフの外見が皇帝アレクサンドル二世と明らかに似ていることから言われているのだろう。公式にはアレクセエフの父親は、退役海軍少佐【капитан-лейтенант】であるイワン・マクシモヴィチ・アレクセエフ（一七九六—一八四九）で、一八三二年の退役までカスピ海で勤務している。

我々の観点からすると、現代の戦史家たちは、アレクセエフの人格と功績に付き、彼の同時代人よりも、よりいっそう、客観的に、そしてよく考え抜いて評価している。

要するに、提督についての情報が我々のところに届いたのは、全く矛盾だらけであり、一部は、確実性が少ないものである。アレクセエフを知っている人々は、しばしば、過度の感情に支配されており、その結果、この非凡な人物の業績を公正に評価することができなかった。以下は、この否定的な見解の一面性に対して、反駁し訂正しようとする試みに他ならない。

まず初めに、未来の極東総督の人生に付き、陸海軍と国家の最も高い地位であるその在任期間一八九九—一九〇五年以前の部分に付き、簡単に述べなくてはならない。

未来の提督は一八四三年五月四日に生まれる。公式には、海軍士官I・M・アレクセエフの家庭に生まれているが、噂では皇帝アレクサンドル二世の庶子とされており、このことは彼に輝かしく、急激な出世を提供したように見える。しかしながら、アレクセエフの履歴の大筋を知るだけでも、この未来の提督がなにか不当に早く出世したとか、例外的に平

穏で快適な勤務環境だったなどとは言えないことが如実に分かる。

一八五六年八月、一三歳の時、アレクセエフは海軍幼年学校【Морской корпус】に入學、卒業は一八六三年、卒業後コルベット艦ヴァリヤーク号に乗艦し、自分にとって最初の世界一周航海に出発した。世界周航中、最初は士官候補生に、一八六三年には海軍少尉【мичман】に昇進した。

一八六七年、アレクセエフは「勲功として」大尉相当官【лейтенантский чин】に任官、一八六九年G・I・ブタコフ少将【контр-адмирал】の旗の下、クリツパー艦ヤホント号に乗艦し、地中海年次遠距離航海に出発した。航海は一八七一年まで続き、一八七二—一八七七年には、再び、地中海、大西洋と、外国航海に出発した。これに関して、是非指摘しなければならないことは、帆走軍艦、ましてや排水量が大きくない艦船での航海は、そのような軍艦勤務とその日常生活の条件が極めて厳しい以上、困難であり、大変な忍耐と不屈を必要とすることである。

一八七八年三月、クレムリン砲台で先任将校に任ぜられた。一八八〇—一八八三年、巡洋艦アフリカ号を指揮し、再び世界周航を行う。一八八二年軍艦は長崎に来航するが、その時アレクセエフ少佐【капитан-лейтенант】は、旭日三等勲章を授与される⁽⁶⁾。

一八八三年、中佐に昇進、コルニーロフ提督号建造の監督のためフランスに派遣される。同艦艦長になったのは一八八六年、同時に大佐に昇進。フランスでアレクセエフは大使館付海軍武官【морской агент】の任務をし、フランス海軍の状況に関する大量の重要な情報を本国に送り続けた。

一八八九—一八九一年、巡洋艦コルニーロフ提督号を指揮し、定時世界周航を行う。一八九二年少将【контр-адмирал】、海軍軍令部長官補【помощник Начальника Главного Морского штаба】の職務に任命される。一八九五年一月、アレクセエフ少将は太平洋艦隊長官になる。一八九七年春、

中将【Виле-дмитриевский чин】、黒海艦隊に差遣された。一八九九年八月、再び太平洋に戻り、関東州陸海軍総司令長官【Главного начальника и командующего войсками Квантунской области и морскими силами】⁽⁷⁾。

このように、遠洋航海を数え上げるだけでも、アレクセエフは自己の海軍勤務の大部分が軍艦上勤務であったことが判る。これは、彼があたかも「自己の海軍内の出世ですら、海軍勤務そのものではなく、むしろ、その外交手腕により獲得している」かのように言う、悪意に満ちた者たちの捏造を論破している。

一八九五年、日露関係間に開戦に至りかねない深刻な緊張が発生した。これに関連し、緊急課題になったのは、ロシア海軍の太平洋における基地の確保に関連してであった。一八九五年夏、太平洋艦隊を指揮するアレクセエフ提督は、旗艦である巡洋艦ウラジーミル・モノマフ号に乗艦し、中国や朝鮮のいくつかの港を訪れ、戦争の際、基地とするに最もふさわしい所を中国チンダオ（キアオチャオ）【青島】と定めた⁽⁸⁾。

一八九六年初めに至り、ロシア人海軍軍人に、軍艦の基地用として、朝鮮の不凍港のひとつを獲得する現実の可能性が発生した。この僥倖局面を利用し、巨済島【остров Капуро】現在の Коржело】獲得を提起した。巨済島はロシア海軍の基地建設が可能であったが、この問題は最終的には決定されなかった⁽⁹⁾。

これらのことはすべて、提督が、狭義の艦隊指揮ばかりではなく、外交諸問題をもうまく処理する能力を持っていることを証明している。明らかにこれゆえに、一八九九年、中国関東州の租借に際し、諸事統括のため、経験のある人物が必要となった際、人選はアレクセエフ中将に下った。アレクセエフは関東州長官、かつまた、陸海軍総司令官に任命された⁽¹⁰⁾。このように、すべての政治行政権力と軍事権力【вся гражданская и военная

власть】が一手に集中したが、それは尖鋭化した地域情勢の条件下では特に重要なことであった。一八九九年一月、アレクセエフは新しいロシアの海軍基地である旅順に到着した。

まず最初にアレクセエフが試みたのは、巨済諸島【на архипелаге Капуро】に拠を置き、朝鮮でのロシアの地位を強化し、モザンボ【馬山浦 Mozamio】地区にはロシア海軍のための石炭倉庫を建設し、その後、基地を建設することであった。これにより、戦争になった場合にウラジオストク・旅順間の通信を幾分でも安全にすることが可能となる。だが、思惑は、合理的な結果に達することはできなかった。中国では義和団（拳匪）の乱が勃発していたからだ。

蜂起した人々の一般的な目的は外国人の国土からの追放であった。加速化する情況下、自己の正当性を主張する最後の手段、すなわち力による干渉に希望が残った。ロシアは軍事的プレゼンスを増強し始める。

注目すべきことは、この戦争において、我が国の連合国のひとつは日本であり、その日本と、ロシアはわずか四年後に、しかも同様に中国の領土で、武力紛争に突入したことである。日露両国を除いても、中国での軍事行動には、フランス、ドイツ、アメリカ、イギリス、イタリア、オーストリア・ハンガリーが参加した。各参加国の目的と課題は様々で、明らかに、一部は相互に矛盾していた。

一九〇〇年の軍事作戦で最大と鍵となるのは、海軍と上陸部隊が協力して遂行した連合国による大沽堡壘の奪取である。一九〇〇年七月四日夜半、大沽堡壘は強襲で奪取された。中国人は多数の死傷者を出すことになった。大沽要塞の指揮官、ロ・ユングアン【羅榮光】は自決した。中国艦船は武装解除され、アレクセエフの命令で、碇泊地防衛網が造られた⁽¹¹⁾。

中国の連合国への宣戦布告の後、アレクセエフは直隸域での戦闘における【на Печелийском театре военных действий】司令官に任命とされた。

アレクセエフの指揮の下、蜂起者により、満州と東清鉄道から遮断された関東半島【Квантунский полуостров 遼東半島】の防衛線が強化された。提督の命令によりインコウ【Инокю 營口】に派遣された急襲部隊はロシア人にとり大切な港の確保に成功した。強襲の次の日には既に、アレクセエフは市街に到着し、そこに行政・軍事組織を創設した。

一九〇〇年九月、提督は自ら指揮し、天津側から北京を遮蔽するペイタン【Peitan 北塘】要塞を強襲し、成功するとともに、同様に満州南部をロシア軍部隊が攻撃する際の指揮も自らとった。¹²⁾

明らかに中国での軍事行動時、アレクセエフは、自己の最も良い面を発揮し、他の人間が彼の代わりにとってかわることなどとても出来ないほど、文字通り極めて効果的に行動した。それゆえ、世間一般の意見にもかかわらず、提督には陸軍指揮の経験もまたあり、完璧に成功している。義和団の乱の際の然るべき効果的な陸海両軍の指揮により、アレクセエフ中将【вице-адмирал】は星とダイヤモンドの付いた金の武器付きの、「大沽、天津、北京、一九〇〇年」の銘の入った白鷺勲章を授与された。それ以外に、フランスのレジオンドヌール・グラン・クロワ勲章【орден Почетного легиона большого офицерского креста】、ロシアの勲章赤鷲一等勲章星附、ベルギーの勲章レオポルド大十字勲章を受章、一九〇〇年五月には侍従武官長【генерал-адъютант】を下された。¹³⁾ そのようなたくさんの勲功や褒賞は祖国に対する提督の明白な功績の証拠である。

軍事行動遂行後、アレクセエフは、ロシアが獲得した橋頭堡の強化に着手した。アレクセエフの建議と直接の関与により、海軍の増強と関東

半島の防衛強化が始まった。関東州全域においてアレクセエフ司令官が関与しなかったような問題はなかった。それは沿岸要塞増強、海軍基地と街の建設、水路測量、海底掘削作業などである。その他、新聞の出版、さまざまな疾病の治療、図書館に本を置くことに至るまで、文字通りこまごましたことがアレクセエフの時間をとった。

アレクセエフの無尽蔵の精力により、旅順は、極めて短時間で、平凡な中国の村落から、時代にふさわしい近代的な都市へと変貌した。もちろん、計画されたことすべてが成し遂げることができたわけではない。だが、この短期間に達成されたことは少なくない。提督のこのまごうことなき貢献に対し、E・I・アレクセエフを評価していなかった陸軍大臣A・K・クロパトキンでさえアレクセエフを「旅順の善良なる英雄」と名付けたのもゆえなきことではない。

当時の人々の最も不評を買ったのは、アレクセエフの外交活動であった。二〇世紀の初め、首都では二つの相争う政治集団が成立していた。一方は、断固たる対日強硬派である内大臣A・M・ベズブラーゾフ（一八五五—一九三二）が指揮する。他方は、極東情勢に対し比較的穏健派である影響力の大きい大蔵大臣S・U・ウイッテ（一八四九—一九一五）が先頭に立つ。皇帝ニコライ二世は、日本の侵入を阻止することを目的とした段階的「朝鮮の平和的征服」計画を支持し、ベズブラーゾフ派の方をよしとした。

しばしの躊躇の後、アレクセエフは、より強硬で断固たるベズブラーゾフ派に属することを決心し、そのためロシアのリベラル派の間で、激しい批判を浴びることになる。そのような決心をしたのは、提督にはいくつもの明白な理由がある。対日戦争の場合、主たる攻撃力となるのは、海軍であること、そして戦争はもはや不可避のように思われることをア

アレクセエフはことさらによく承知していた。海軍の増強のために必要となるのは財源であったが、それはついてもウイッテを筆頭とする大蔵大臣により削減された。このような状況下、提督はベゾブラーゾフ派を頼りとすることを決心する。同派は影響力を享受しており、アレクセエフの考案では、海軍に対し必要な援助を提示することができると思えたのである。

これらの、疑いなく良き目的と同時に、忘れてはならないのは、アレクセエフに無縁とは言えなかった出世意欲である。影響力のある同盟者の支援の下、アレクセエフは提督の地位と侍従武官長の肩章を得た。急激な出世の極みとなったのが極東総督への任命である。⁽¹⁴⁾アレクセエフ自身、総督制の賛同者ではなかったが、忠実で、さらに軍人らしく、皇帝ニコライ二世の意志に服したという情報がある。

総督は対日強硬政策へと走り、両国関係が悪化する中、外交問題において、負の役割を演じた。

一九〇三年一二月、総督は、皇帝に対し、シベリアと極東では軍隊を臨戦態勢下に置き、満州、ウラジオストク、旅順には軍事制を敷き、鴨緑河の国境線に軍隊を前進させることを宣言するよう求めた。一月、皇帝はアレクセエフにより提出された計画を承認した。提督は海軍の増強を粘り強く求め続け、艦船・人員の補充の追加予算を獲得した。⁽¹⁵⁾

一九〇四年一月二四日、日本はロシアとの外交関係を断交した。この後、首都からの相矛盾する指令により混乱させられ、総督は、数々の失敗をすることになってしまふ。提督は旅順碇泊地外港【на внешнем Порт-Артыском рейде】での艦船の防衛に決定的な方策をとることができず、チェムリボ【Чемурбо】、濟物浦、仁川の旧称【に待機するロシアの哨戒艇【страйонеров】、クルーザー艦ヴァリヤグ号、砲艦コレエツ号】に回答信号命令を適宜発することができず、情況偵察のためのクルーザー艦分艦隊の出動を遅延させることとなった。

結果として、ロシアが対日戦争開始に失敗した原因の一部は間違いくアレクセエフにあるとされた。戦況は深刻化したが、その理由は、軍事行為の開始とともに、司令長官に任命された総督にとり、自分の指揮下でありながら、自分に敵対してくる、太平洋艦隊指令長官S・O・マカロフ海軍中将、満州軍指令官A・N・クロバトキン陸軍大将等の下僚がいることであった。

だが、総督と艦隊司令官の間にある一筋ならぬ関係にもかかわらず、アレクセエフはS・O・マカロフを多岐にわたり支え、海軍の戦争準備を高め、旅順の防衛力を強化することにおいて、全面的に協力した。一九〇四年春、マカロフが悲劇的最期を遂げた後、総司令官は旅順に到着し、自身で海軍の指揮をとった。

提督の海軍到着とともに、海軍軍人たちの戦闘行為は中断した、と一般に考えられている意見にもかかわらず、ここで注目しなければならぬのは、提督の到着直後も、毎日、碇泊地の掃海は続けられ、複数の閉塞船攻撃は撃退に成功し、水雷が設置され、要塞防衛の陸軍は強化されていったことである。その一方で、艦隊の装甲艦の出動が中断されたことも確かである。

まもなく、旅順の陸路封鎖の脅威とともに、アレクセエフはムクデン【Mukden】、瀋陽、当時の名称は奉天【に退却せざるを得なくなり、ムクデンから、麾下の陸海全軍の指揮を執ることになる。

しだいに、満州と関東半島の情勢はますます複雑化した。ロシア陸軍は敗北し、ロシア海軍は旅順に閉塞され、損失を被り、総督はロシアに都合よく戦争を終結させる信念を放棄し始めた。一九〇四年秋、アレクセエフは皇帝に総司令官を退くことを願いだした。一〇月、このような複雑な決断は辛いと日記に書き記し、皇帝は提督の望みを入れた。新しい総司令官には、A・N・クロバトキンがなったが、アレクセエフは総督

の地位を、一九〇五年、つまり、その職務の廃止まで保持した⁽¹⁶⁾。

日露戦争（一九〇四—一九〇五）におけるロシアの敗北は、アレクセエフの政治的キャリアを終わらせた。もし戦争の終結が別の帰結になったら、すべてが逆になり、提督の誤算の数々を思い出す人もまずいなかったであろうことは想像に難くない。

実際はそうはならなかったが、にもかかわらず、アレクセエフは聖ゲオルギー三等勲章を授与され【一九〇四年授与】、海軍大臣ポストの任命の際には候補として考慮もされた。

最期の日まで、アレクセエフは、皇帝からの信頼を保ち続けていた。だが、軍事・政治の高い要職を占めることはもはやなかった。名誉はあるとはいえ、ほとんど意味のない海軍会議【Адмиралтейств-совет】と国会【Государственная дума】の職務に任じられ、重大な政治問題を解決することは既になかった。

一九一七年四月、アレクセエフ提督は退役し、同年五月、クリミアの都市ヤルタで他界した⁽¹⁷⁾。

偏見なしに、アレクセエフ提督の全人生行路を分析し尽くすと、広く一般に流布している考え方もかわらず、彼は実に並々ならぬ人間である、という結論に達することができよう。もちろん、誰もがそうであるように、提督にも短所がなかったわけではないし、その多大な活動には欠陥がなかったわけではないが、一般に言われているように、何もしない者は過ちを犯すこともないのだ。アレクセエフは何もしなかった、などと非難することは、なんとしても絶対にできない。意志が強く、活

動的、自己に任された任務に誠心誠意対処し、アレクセエフは、一九世紀末から二〇世紀初めの最もすぐれた海軍司令官であり政治家の一人である。
(有泉和子訳)

[注]

- (1) Витте С.Ю. Воспоминания. Т. 2. М., 1960. С. 252.
- (2) Витте С.Ю. Воспоминания. Т. 2. М., 1960. С. 262.
- (3) Суворин А.С. Дневник. М., 1923. С. 370.
- (4) Воспоминания участников русско-японской войны. Нью-Йорк, 1955. С. 29.
- (5) Игнатъев А.А. Пятьдесят лет в строю. М., 2002. С. 151.
- (6) РГАВМФ. Ф. 32. Оп. 1. Д. 3. Л. 36.
- (7) Военная энциклопедия. Т. 1. СПб., 1911. С. 300.
- (8) РГАВМФ. Ф. 650. Оп. 1. Д. 134. Л. 5-9.
- (9) РГАВМФ. Ф. 32. Оп. 1. Д. 136. Л. 2-5 об.
- (10) Военная энциклопедия. Т. 1. СПб., 1911. С. 302.
- (11) РГАВМФ. Ф. 418. Оп. 1. Д. 5753. Л. 15, 16, 19.
- (12) РГАВМФ. Ф. 467. Оп. 1. Д. 45. Л. 83, 84.
- (13) Военная энциклопедия. Т. 1. СПб., 1911. С. 303.
- (14) Там же.
- (15) РГАВМФ. Ф. 32. Оп. 1. Д. 170. Л. 1, 2.
- (16) Военная энциклопедия. Т. 1. СПб., 1911. С. 306.
- (17) Советская военная энциклопедия. Т. 1. М., 1944. 145.

本研究集會は、基盤研究S「マルチアークイヴァアル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(課題番号二六二二二〇四二) 研究代表者：保谷 徹の一環として、その経費の一部も使用して行なった。